輝く学年団を訪ねて

1年次4月からの迅速な指導改善を、長年の学校課題の突破口に

長野県小諸（こもろ）高校　3学年団

学年団が直面した課題

◎例年、学力が多様な生徒が入学してくる中で、学習意欲や学習習慣の面で課題のある生徒への対応が求められていた。

◎成績下位層の生徒へのきめ細かな指導に加え、成績中上位層の生徒を伸ばすための指導を充実させる必要があった。

学校概要

日本百名山の1つである浅間山のふもとに位置する。1995年に県内唯一の音楽科を開設。普通科と音楽科の生徒が互いに刺激し合いながら、日々の諸活動に取り組んでいる。運動系では、全国大会常連のレスリング部、陸上競技部を始めとする12団体が、文化系では、音楽科の特性を生かした吹奏楽部や音楽部などの9団体が活発に活動している。2026年度には、長野県小諸商業高校との統合が予定されており、新たな歴史を踏み出す。

設立　1906（明治39）年
形態　全日制／普通科、音楽科／共学
生徒数　1学年約160人
2021年度進路実績（現役のみ）　国公立大は、北海道教育大、筑波大、千葉大、東京藝術大、信州大、愛知県立芸術大などに10人が合格。私立大は、國學院大、東海大、日本大、松本大などに延べ73人が合格。短大・専門学校進学81人。就職10人。

1年次4月から、事前学習・振り返り・事後学習の過程を定着させる

様々な希望進路の生徒が集い、それぞれの進路実現に向けて、日々切磋琢磨する長野県小諸高校。例年、新入生の学力は多様で、学習意欲や学習習慣の面で課題のある生徒への対応に、同校1学年団は苦慮してきた。2020年度の1学年主任を任された生駒圭一先生も、その状況を課題視していた。

「入学式の約2か月前には、20年度の1学年の担任が決まりました。そのタイミングで、学力や学習意欲が多様な1年生にどう対応していくかについての話し合いを、週1回程度の頻度で始めることにしました」

話し合いの中で、生駒先生は、長年の課題に取り組む上で大きな力となり得る学年団の強みを見つけたという。それは、「新しいことも恐れずにやってみよう」という情熱だ。

「前例に縛られず、いろいろなことをやってみようという意欲を学年団から感じました。このメンバーなら、思い切った取り組みも可能だと確信しました」

学年団のキーパーソンと生駒先生が考えたのが、齋藤広踏先生だ。新年度を前に、齋藤先生は積極的に他校視察に出かけ、様々な実践事例に触れていた。

「私が訪問したある学校は、スタディーサポートを軸にした指導サイクルを確立していました。本校でもスタディーサポートは、例年複数回実施していましたが、各回が単発の取り組みになっていました。高校3年間の学びはどのようなものであるべきかを生徒に理解してもらうためには、入学直後のスタディーサポートに関する指導を強化することが必要だと考えました」（齋藤先生）

齋藤先生は、1年次4月のスタディーサポートの活用について学年団で話し合いたいと生駒先生に提案。生駒先生は早速、ベネッセの学校担当者による担任対象の研修会を実施し、スタディーサポートを軸にした指導サイクルの確立について検討した。そうして構築されたのが、「事前学習→スタディーサポート受験→振り返り・事後学習」を1セットとして、その後のスタディーサポートや模擬試験につなげていく指導だ（P.34図）。

「学力が多層化している生徒集団の場合、特に低学年次は、相対評価の模擬試験よりも、絶対評価が中心のスタディーサポートの方が指導に生かしやすいと、先生方に訴えました。そして3月には、スタディーサポートの事前課題を入学前の生徒に取り組ませ、それを4月以降に担任がチェックした上で、生徒はスタディーサポートを受験し、振り返り、事後

リーダーに聞く！5つのQ&A

Q どのようなチームを目指しましたか？

A みんながそれぞれの考えを率直に言い合えるチームです。

Q リーダーとして心がけていることは？

A 計画を立てる際にはまず、学年団の先生方の意見をきちんと聞くことを大切にしています。そのためにも、先を見通して、余裕を持ったスケジュールで進めることを心がけています。

Q 学年団としての「成功」は？

A 学年団が取り組んできたことが実を結んで、一人ひとりの生徒が納得できる進路に進むことです。

Q リーダーとして自覚する長所は何ですか？

A いろいろな先生方の話を聞き、コミュニケーションを取ることができるところだと思います。会議でも、「先生はどう思いますか」と、一人ひとりに声をかけています。

Q リーダーとして自覚する短所は何ですか？

A 多様な意見が先生方から出てきた時に、「これでいこう」と決断することがやや苦手です。学年団の先生方や管理職に相談しながら決断するようにしています。

学習へと進みました。その後も、スタディーサポートや模擬試験の度に、同様のプロセスを繰り返しました」（齋藤先生）

生徒との丁寧なコミュニケーションで学習に向かう姿勢を育む

指導サイクルを確立した学年団は、生徒がそのサイクルに適応できるよう、学習習慣の確立に着手した。まず行ったのが、「Classi」（＊1）での課題配信だ。英語科や数学科が連携して、配信した課題を次の授業の冒頭で取り上げるなど、課題配信と授業の接続を強化した。また、生駒先生は、「Classi」での生徒とのコミュニケーションを通じて、学習の大切さを伝えることに力を入れた。

「『Classi』上での生徒の発信に教師がこまやかに反応することが、学習意欲の向上につながった事例が、担任対象の研修会で紹介されました。そこで、日々の学習状況について、生徒が『Classi』上で気軽に語れるようにしたいと考えました」（生駒先生）

学年団で学習や進路に関するアンケートを実施するとともに、担任はHRや「Classi」を通じて日々の学習の大切さを訴えたと、木村祐子先生は振り返る。

「『Classi』上で、各クラスの家庭学習時間を紹介したり、生徒に日々の学習時間を記録することを呼びかけたりするうちに、『昨日は勉強できなかったけど、今日はできました』などと書き込む生徒が増えていきました。そうした書き込みに対して私がコメントを返すと、別の生徒が学習に関するコメントを書き込むといったやり取りを続ける中で、家庭学習時間が少しずつ改善していきました」

生徒とは真面目な話だけではなく、冗談も交わしたと、齋藤先生はほほ笑む。

「部活動に夢中で家庭学習時間が増えないと打ち明ける生徒に、『夜中にグラウンドに穴を掘って練習できなくするよ』と、冗談のコメントを書いたところ、それを見たほかの生徒が、『自分も学習時間が増えません。懲らしめてください』と言ってきたこともありました。そうしたざっくばらんな雰囲気が、みんなで学習に向かうクラスづくりの過程には必要なのだと思いました」

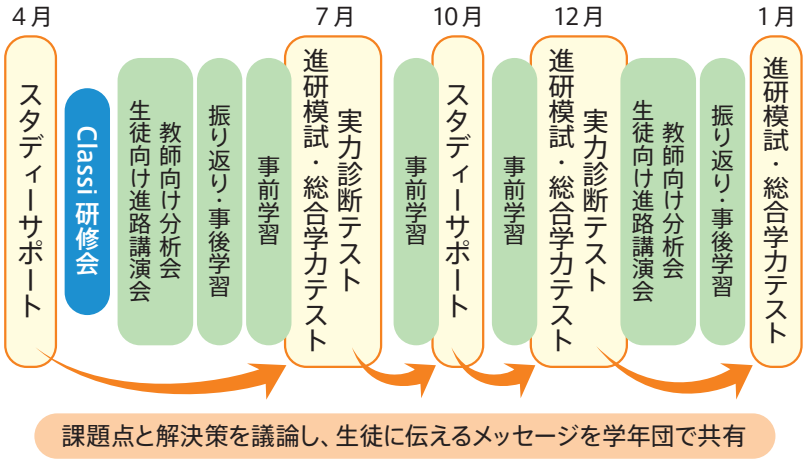
さらに学年団では、指導サイクルを円滑に回すため、定期考査前に、成績不振者を対象とした特別補習も実施した。各教科担当との調整役を任されたのが丸山雄三先生だ。

「学習スペースを校内に確保した上で、特別補習を各教科担任にお願いしました。定期考査の作問などで多忙な時期だったため心苦しかったのですが、スタディーサポートで明らかになっていた弱点分野を示しながら、『こだけでもぜひ！』とお願いしました」

そうした1学年団の取り組みの成果は、早い段階で表れてきたと、進路指導主事の坂口俊夫先生は語る。

「スタディーサポート2年生第1回では、GTZ（＊2）のDゾーンの生徒が減少し、Bゾーン以上の生徒が増加するなど、例年とは異なる結果が出ました。日々の学習に粘り強く取り組む生徒が増えたと感じています」

図　スタディーサポートを軸にした指導サイクルの構築（1年次）



1年次4月のスタディーサポートは、事前課題に取り組ませた上で受験。結果の振り返りと事後学習を経て、次の模擬試験に臨ませた。スタディーサポートや模擬試験を単発の取り組みに終わらせないための工夫だ。

※学校資料を基に編集部で作成。

＊1　株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社であるClassi株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。
＊2　ベネッセのアセスメントにおける共通の学力評価指標、「学習到達ゾーン」のこと。「S1」～「D3」の15段階で評価される。

3学年主任
生駒圭一（いこま・けいいち）
教職歴38年。同校に赴任して8年目。
数学科。

進路指導主事
坂口俊夫（さかぐち・としお）
教職歴35年。同校に赴任して9年目。
地理歴史・公民科。

3学年担任
齋藤広踏（さいとう・ひろふみ）
教職歴13年。同校に赴任して9年目。
情報科。

3学年担任
依田潤子（よだ・じゅんこ）
教職歴14年。同校に赴任して9年目。
音楽科。

3学年担任
木村祐子（きむら・ゆうこ）
教職歴8年。同校に赴任して4年目。
英語科。

3学年担任
丸山雄三（まるやま・ゆうぞう）
教職歴7年。同校に赴任して5年目。
地理歴史・公民科。

学科や教科、さらに学年を超えて、学校全体の取り組みに昇華

学力向上の取り組みは、音楽科の生徒にも及んでいると、クラス担任の依田潤子（よだじゅんこ）先生は語る。

「音楽科には、難関国立大学を目指せるレベルの学力を持つ生徒から、音楽以外は全く興味が持てない生徒までおり、普通科の生徒以上に学力が多様です。学力が向上すれば進路の選択肢は増えますから、やればもっとできる生徒を伸ばしたいと、以前から思っていました。そこで、生駒先生に相談した上で、学年会で『成績中上位層を伸ばす授業をお願いします』と、先生方に訴えました」

成績下位層の生徒が取り残されるのではないかという他の教師の不安を、依田先生は、「成績不振者の補習は、私がやります」と払いのけた。音楽科の生徒に対する授業の変化、そして依田先生のサポートは、明らかに生徒を変えたと、木村先生は説明する。

「依田先生の思いを受け止めて、私も中上位層向けの授業を行っていますが、英語が得意ではない生徒も、一生懸命授業に取り組んでいます。授業後に質問に来る生徒の多くが音楽科ですし、『GTEC』でも、音楽科の生徒がいつも上位に入っています」

学年団の様々な取り組みは、ほかの学年団にも波及していると坂口先生は語る。

「生駒先生たちが始めたスタディーサポートを軸にした指導は、現1・2学年にも引き継がれました。取り組みを学校全体のものに昇華する段階に来ているのだと思います」

生駒学年である3学年の生徒たちは今、それぞれの進路選択の岐路を迎えている。

「生徒全員が、やるだけのことはやったと納得して卒業できるよう、学年団が一丸となって、最後までできる限りの支援をしていきます」（生駒先生）

学年団 輝きのポイント

- 単発の取り組みになっていた各アセスメントを、事前学習と振り返り・事後学習でつなぎ、3年間の指導サイクルを構築した。
- 特別補習や成績中上位層を伸ばす授業の必要性を訴える教師の情熱が、他の教師を動かした。